

公益社団法人 横浜市幼稚園協会発行
 〒221-0055
 横浜市神奈川区大野町1-25
 横浜ポートサイドプレイス アネックス5F
 電話 045 (534) 8708
<http://www.kids-yokohama.or.jp>
 編集 横浜市幼稚園協会広報部
 発行者 木元 茂
 印刷所 合資会社横浜大気堂

協会報 浜私幼

園長・設置者・保護者版

No.254

▼第21回父母セミナー
 「子どもの心に添ってみましょう
 ～子どもの気持ちがみえてきます」
 ▼教育研究大会ご案内



第21回 父母セミナー

日時:平成25年10月29日(火)
 場所:横浜市教育会館

「子どもの心に添ってみましょう ～子どもの気持ちがみえてきます」

平成25年10月29日に横浜市教育会館において(公社)横浜市幼稚園協会と横浜市父母の会連合会の共催により第21回父母セミナーが411人の参加を得て開催された。

開会に先立って、田野岡由紀子幼稚園協会副会長より幼児教育の振興に向けた父母の会の活動に対するお礼が述べられ、続いて古谷みずほ父母の会長はこれまでの父母の会の活動を紹介し「柴田先生のお話から、子育て・自分育てのヒントをたくさん見つけたいと思っています」と挨拶した。来賓の横浜市こども青少年局子ども支援部子育て支援課長の春原隆之氏から横浜市が行っている子育て支援の報告を交えご挨拶をいただき講演に入った。



講師:「りんごの木」代表・保育者 柴田 愛子 先生



幼稚園協会副会長
 田野岡由紀子先生



父母の会会長
 古谷みずほさん



子育て支援課長
 春原隆之氏



講演の要旨

きょうは、「子どもの心に添ってみましょう」というタイトルでお話をさせていただきます。わたしの基本姿勢にしていることをお話ししたいと思います。

正しい幼児教育とは？

わたしは20代のときに希望を持って、都内の私立幼稚園の教諭になりました。その当時は若かったということもあって、正しい幼児教育をすればきちんとした子が育つと思っていました。いい先生になって、いい子を育てたいと思いました。正しい幼児教育を求めて勉強しようと10あまりの研究会に入り勉強しましたが、勉強すればするほど、何が正しいかわからなくなり、いろいろな考え方があることだけがわかりました。

その結論としては、どうやら正しいものはないのではないかということでした。いろいろな考え方があり、子どもはこう育てればこう育つという、 $1+1=2$ というようにシンプルにはいかないということです。どの子にもこういう教育をすればきちんと育ちますというものはないのではないかという結論にたどりついたのでした。

時代によって違う

時代によって子育てや教育はずいぶん変化しています。一番わかりやすいのは赤ちゃんの育て方だと思えます。以前は赤ちゃんが産まれたとき、産湯できれいに体をぬぐいました。でも今は、産湯は赤ちゃんの体温を一気に下げるのでよくないとされています。かつては赤ちゃんが泣いて抱くと抱きぐせがつくと言われました。ところが今は泣いたら抱いてあげましょうと言われていて、かつては添い寝をすると自立心を阻むからやめま

しょうという時代がありました。今は添い寝をして安心して寝かせてあげましょうと言われていて、

このように時代によってとても変わっていることがわかります。時代によって考え方はいろいろあり、それが正しいように思えて従うのですが、そうしなければ子どもは育たないということではないのかもしれない。

様々な説が報道され、それが事実であることは確かです。それに流されるのが世の常でもあります。けれど、こうすればいいという確かな真実は一つではなく、時代によって動いていくものだと思うのです。

文化によって違う

もう一つは、同じ時代でも国や地域によって子どもの何を大事にするかという考えはずいぶん違います。

たとえば、子どもを公園に連れて行き、子どもが水道で水を飛ばして遊びだすとします。横浜市など関東近県では母親がすかさず止めに入ることが圧倒的に多いのです。どうしてかと聞いてみると、皆さんにご迷惑ですということでした。ところが大阪では、公共の水なのになぜ止めなくてはいけないのかと言います。つまり、子どもをきちんとしつけようとしているそのしつけの内容は大きな地球の小さな日本のほんの一点の価値観かもしれないということです。

専門家によって違う

専門家に言われるとその通りにならなければいけないような気がし

てきます。たとえば、子どもが指しゃぶりをしているとします。歯科医を受診すると、指しゃぶりをしていると歯並びやあごの形が悪くなり、永久歯にも影響するのでやめたほうがいいと言われます。専門家に言われると、やめさせなくてはと思ってしまいます。でも、あの手この手を使っても成功することは少なく、機が熟せば自然と直ります。少し前の心理学の先生は、指しゃぶりは愛情不足の表れだと言いました。今は、指しゃぶりで安心するのであれば無理にやめさせることはないと言われています。

専門家は狭い専門分野のなかの研究されている途上のことを公表しています。それは事実かもしれませんが、そうしなければ子どもが育たないということではないのです。やってみてできなかったら、できない自分を責めるのではなく、あきらめて違うことをまた努力していけばいいのです。そのうちに子育ての悩みは変わっていきます。

情報によって違う

もう一つは、今はデータというのがインターネットなどですぐに目に入ります。1歳までのうちは身体的発達で満足できていたのに、2歳くらいになると他の子と比較をしてしまいます。「早い・普通・遅い」の評価の中で子育てをしてしまいがちです。先を見たらそれほど変わらないのに、早くできると嬉しいのはどうしてなのでしょう。この早い・遅いの評価の中で子どもを育てていると、たとえば2歳で歩き始めた子がいるとすると、心配になってもう一生歩かないのではと

思えてきます。するとやっと歩いたときには、2本足で歩くというその子にとって画期的な出来事がもう喜びではなく単なる安堵になってしまうのです。親が早い・遅いを気にすることによって大きく違うのは、子どもの気持ちなのです。常に喜ばれて育つのと、遅いのではないかと不安に思われて育つのと、子どもの心もちは大きく違います。情報のもさしでわが子を計り、評価をすることが多くなったせいで子どもは大変な思いをしているように思うのです。

ありのままを受け入れる

チャイルドラインという「電話でつくる心の居場所」という全国組織があります。そこの調査で、自分は孤独であると答えている小学生が30パーセントいるという結果がありました。たとえば、ある子はテストで80点とったら、次は90点とるように求められると言います。つまり、ありのままの自分を受け止められている感覚がないのです。そのことが日本の子どもたちの自己肯定感、自尊感情をたいへん低くしています。ありのままのその子でいい。情報のもさしではなく、その子にはその子のものさしがあります。少々遅くともきちんと育っていきます。小さいうちほど可能性があるために、親は情報に振り回されてしまいます。

こうやれば立派な子どもが育つという方法はないらしいとわたしが気づいたときにたどりついた結論は、子どもの健やかな成長のために勉強してきたけれど、どれも大人の言い分ばかりだということでした。今の社会がどういう子を望んでいるのか。先生がどういう子をいい子と評価しているのか。教育

界は今どういう方向を向いているのか。親はどういう子を望んでいるのか。どれも大人の思いばかりでした。

子ども自身に感じる心、考える心、大きくなろうとする力はないのでしょうか。子ども自身のことをもっと知る必要があると思いました。

子どもの心に添うということ

親だから子どもをよく知っていると言えるでしょうか。大体の親は、常に先を心配して頭で考えて子育てしていることが多いと思うのです。子ども本人はどう感じ、どう考えて、どう受け止めているのでしょうか。そこで、わたし流にやったことが、「子どもの心に添ってみよう」ということでした。

具体的に言いますと、子どもの心に添うということは、こう思っているのかなということを、口に出して声をかけることです。たとえば、子どもが転んだときには「痛い」としか思っていないはずですが、「痛かったねえ」と言ってあげることが心に添うことなのです。

泣き虫な子は、泣くことはできても話すことは苦手です。子どもが泣いているとき、たいていの大人がかける言葉は「どうしたの?」です。でも、どうしたのか言える子は泣いていないのです。言葉にならず泣けてしまうのです。しかし、泣いていては大人に訳がわからない、大人は訳を知って解決したいと思うため、言葉で訳を言うことを求めてしまうのです。子どもは、感情は持って生まれます。でも言葉にすることは、まだできるようになって日が浅いのです。

子どもの心に寄り添うためには、訳を聞くのではなく、「怒っているんだね」「悲しかったね」と感情

に寄り添うことです。子どもは訳を知ってもらってほっとするのではなく、感情を共感してもらってほっとするのです。すると、ほっとして落ち着いた後に、「だってね」という言葉が自分から出てきます。

幼稚園から帰ってきた子どもに「今日はどうだった」と聞くのはよくないでしょうかという質問を受けたことがありました。なんでも知っていたい親心はわかります。でも幼児にとって過去の記憶をたどって、それを言葉にするのは不可能です。ですから、親として気をつけるところは、いい顔で帰ってきているか、元気があるかないか、その子の顔色を見ることです。言葉で語らせることよりも、その子がそのとき発している元気がどうかの空気を感じることです。黙って待っていたら、子どものほうから「聞いて、聞いて」と言ってきます。子どもは聞いてほしいのです。「ただいま」と帰ってきたときに、「元気に帰ってきたね、楽しかったのね」と言ってあげることです。

心に寄り添うことを、子どもが赤ちゃんのときはみんなできていたはずですが、言葉を話さない赤ちゃんだから、泣いたらどうしたのかなと身を寄せてあれこれ想像したことでしょう。言葉を話し始めると途端に言葉を求めてしまい、子どもの表情を見抜く勘がにぶってきてしまいます。子どもの気持ちを知りたいと思ったら、共感することからだと思うのです。そうやって見ていたら、子どもはすぐくいろんなことを感じていることに気づきました。

子どものコミュニケーション

見ているとだいたい3歳くらいまでは、子どもは言葉ではなく表情と行動でコミュニケーションをとっ

ています。3歳くらいの子は、感性がとても豊かです。でも大人のように言葉のコミュニケーションはまだあまりできません。ですから、ケンカ、ものを取り合う、押す、噛むなど、大人目から見るとマイナスの行動から関係が生まれることが多いのです。4歳になってくると言葉を使って思考するようになります。5歳になるとさらに思考回路ができてきて、年長くらいになると大人にとってもわかりやすい年齢になります。

不登校になっている子どもたちは、学校に行かなくていいと思っている子はほとんどいません。学校に行けなくなったときに、行けないんだと言葉で言える子はまずいません。たいていは、食欲がなくなる、笑顔が少なくなる、靴を履くのに時間がかかる、さらに靴が履けなくなる、食べ物をもどすようになる、目の焦点が合わなくなるということが表れてきます。言葉だけに頼って子どもを育てていると、子どもの表情からその内面を見抜く親の勘がにぶってしまうと思うのです。子どものことを全部知ってはいなくてはいけいけいではなく、子どもが今健康かどうか、何か抱えているかどうかを見ることが大事です。それで何か変だと思ったら、優しくしてあげてください。たいていの子どもは心と体がぬくもると何か言ってくるので、そこで治ってきたり、原因が見えてきたりするものです。

親の知らない子どもの顔

親の質問に「忘れた」と答える子どもがいます。子どもは、親の見えないところに行ったときから複数の顔を持ち始めます。幼稚園に行っている子だったら、家で見せる顔、幼稚園の先生に見せる顔、友

だちに見せる顔と、最低でも3つあります。親はどれも知っていたいけれど、知りえません。知ろうと思っただけではいけないと思うのです。親が喜ぶことは何か子どもは百も承知です。けれども成長するうえで母親が嫌がることもやっていかなくてはならないのです。それは、親の目を盗んでやっていくものなのです。

さらに年齢が進むと、より多くの顔を持つようになります。それはいい悪いではなく、生きる力であるわたしは思っています。人間の子どもは自立までに時間がかかります。子どもは一人で生きていけないという危機感をみな持っています。保護してくれる人がいるから生きていけると本能的に知っています。親のほうに命綱を握っているのです。子どもは親から嫌われないよう、捨てられないよう、親が望む自分を好んで見せているのです。複数の顔を持つことは、子どもの生きていく力だと言えるのです。

子ども本来の生きていく力

親は先のことを心配して、子どもに良かれと思って育てていきます。けれど、子どもは今を生きています。そしてそれを全部親にわかってほしいとは思っていません。子どもにとって大事なことは、親から見捨てられないことです。それさえ安心できれば子どもは、本来育つ力を発揮できるとわたしは確信しています。

子どもは育つ力を持っています。けれども、その子とその子本来の育ちを健康にしていくために、どうしても必要なものがあります。それは、大丈夫だよ、ここにいるよという親の背中へのぬくもり、何かあったときに抱きしめてくれる親の膝で

す。心配で振り返ったときにそこにいてくれること、ちょっと背中を押してくれること、親子関係という「見えないへその緒」がきちんとつながっていることです。

子どもは親の顔色をよく見ています。それは子どもからのラブコールです。そのくらい母親から思われているから大丈夫という気持ちで子どもを大きくしていくのだと思っています。

ケンカをするとき

子どもがケンカする相手というのは、仲のいい子です。ケンカになるのは、近くにいる相手、ありったけを吐き出せる相手、ケンカの後に修復可能な関係にある相手です。だからきょうだいゲンカが多くなるのです。

ケンカをしているときに事情を聞いたり判決を下したりしようとしても、原因があるのかわからないことも山ほどあります。ケンカの原因はシンプルではありません。うまく理由を言えるわけではないのです。

きょうだいゲンカの最中に親が近づいてきたら、子どもがまず考えることは、お母さんはどちらの味方につくのかということです。どちらを悪いと言っても、母親が正しい評価をしたとは思ってられません。どちらかが不満を持つ結果になるので、ケンカの仲裁はあまりいいこととは思えません。きょうだいは、親の愛情を奪い合うライバルです。

八つ当たりができるのは、健康な家族です。ケンカの仲裁はしないで、「お母さんはケンカは嫌い、うるさいからやめて」という理由で止めればいいのです。判決をするのではなく膝に抱いてあげて「ケンカになっちゃったね、痛かったね」

と言ってあげればいいと思います。私は子どもたちからこう教わりました。それは、何かがあったときに寄り添ってくれる人がいることで、本来の自分を取り戻せる。そして本来の自分を取り戻したなら、自分から一歩前を出ていけるということです。寄り添ってくれる人がいることで、子どもの世界はどんどん広がっていきます。何かあったときに寄り添ってもらえる、わかってもらえる、ここは帰ってきていい場所なのだという安心感を持つことがその子が一歩前に進んでいく力になるのです。

最終的には親の愛情というのは、子どもに温かいご飯と寝る場所を用意して、顔色をチェックして様子を見ることで十分なのではないかと思えます。

親が伝えていくこと

感情で叱ってはいけないという人がいますが、感情がなかったら叱っていません。どういふときに叱ればいいですかという質問がよくありますが、「あなたが嫌なときです」と答えています。叩いてしつけることをいいとは絶対に言いませんが、思わず叩いてしまったということがあるでしょう。そのときは、「しまった」という心の痛みと手の痛みを感じながら子どもに「ごめんね。やりすぎちゃった」と伝えていけば、「あなたのこと捨てたりしないよ、嫌いじゃないよ」という気持ちを伝えていけば大丈夫です。そのくらい正直に向き合っているのです。いい子に育てよう、育てようとしなくてもいいと思うのです。

今はいい子を求めて、効率よく、無傷で、お金をかけて専門家に頼んで人間を作っていくのがはやってるように思っています。けれど、無傷

で育っていくのは無理です。人間関係を作っていくときでさえも傷は生まれるものです。

あなたのうちの子は、あなたのうちの子らしく元気に育っていけばいいのではないのでしょうか。親の願いを背負って苦しんでいる子どもが日本にはたくさんいます。自分の願いを子どもに背負ってもらうことはやめましょう。親も自分の人生をあきらめずに、自分の人生を自分らしく作って行ってください。子どもは子どもの人生をもうスタートしているのです。お互いに誠意をもって、正直な関係を作っていけばそれでいいのではないかと思います。

心に添うということは、子どもの思うとおりにしてあげることもなく、理解してあげることもありません。共感してあげるということなのです。

けれども、ときには心に添っている場合じゃないときもあります。特に年長になってくると、自分を正当化するためのウソをつくようになります。仲間と群れていじめに近い構図をつくるようにもなります。欲しいものを勝手に持ってきます。そういうときは、烈火のごとく怒ってください。ウソがばれて、怒られて、そして子どもはほっとします。年長くらいから悪いタネみたいなことをあれこれとやりだします。そこは目を光らせて、「そうはさせない」と叱ることも必要です。

私は人を差別したり、侮辱したり、金銭にかかわることは、心に添ったりせずはっきり怒ります。これは許せないというときは思いきり怒って構わないと思うのです。親が大事にしていることをきちんと受け継いでいけばいいのです。世の中の価値観ではなく、自分のうちの価値観を伝えていくことのほうが大事です。それこそが、人が人を育てることだと思ふのです。

共に育つ

育てているうちに、子どもから育てられていることもたくさんあります。子どもからの問いによって、今まで考えたこともないことを考え、無意識的だったわたしがどんどん意識的なわたしに育てられているような気がするのです。最初は子どもが健やかに成長してほしいと思ってこの仕事に就きましたが、最近では子どもから自分づくりの栄養をいただいているように思っています。

そんなふうに関わり育っていかればいいのではないかと思います。子どもと共に育っていく、誠意のある関係、それで十分ではないでしょうか、そのように思っています。

ありがとうございました。

編集後記

講演会が盛んに実施されています。訪れた幾つかの会場もよく人が集まり、大旨子育て関連のテーマが主であります。

幼児期のとらえ方、家庭での親子関係を土台に子どもの育ちの本質が今更のように再認識されるにつれ思うことは、契約と効率で成り立つ社会構成の奔流へいずれ船出する子ども達のことです。

広く社会を海とすれば人間本質を求め築き上げていく家庭は陸。その間の緩衝地帯として干潟の存在する所は概して地勢豊かであります。家庭という場所で自らが無意識のうちにも干潟の役割を果たしてがんばっているのが日本のお母さん達なんだな～と痛感致します。(広報部 井上 貴恭)

横浜市幼稚園協会の教育研究大会に参加してみませんか？

子どもや子育てにやさしい横浜を どう実現していくか

後援
横浜市子ども青少年局

～子ども・子育て支援新制度を子どもの視点から問い直す～

保護者の参加
大歓迎です

平成25年度 第51回 横浜市幼稚園教育研究大会全体会

平成26年 2月1日(土) パシフィコ横浜

子どもたちを取り巻く
環境は今どうなっているの？



専門家の
生の声をきく
チャンスです★



新制度ができれば
どうなるの？



平成27年4月から本格実施が予定されている子ども・子育て支援新制度に向けて、幼稚園や保育園という枠を超えて、子どもや保育に深くかかわっている方々から幅広く子育ての現状について意見を伺います。その上で、横浜の保育や子育てがより充実していくために求められる子育て支援のあり方や、幼児教育・保育の理念や方向性などについて、今後の幼稚園や保育園、認定こども園の役割も含め、会場に集まる多くの方と一緒に考える機会にできればと思います。

- 日時 平成26年2月1日(土)
9:45~12:25(受付9:00~)
- 場所 パシフィコ横浜 国立大ホール
- 参加費 無料
- 申込み 各幼稚園にお申込みください。
- 締め切り 12月25日(水)
- 当日予定 開会のことば
会長挨拶
来賓挨拶
来賓紹介
講演

公開講演

司会

大豆生田啓友
(玉川大学教育学部乳幼児発達学科准教授)

シンポジスト

- 渡辺久子 (慶應大学小児科医)
子どものおかれている危機的状況について
- 汐見 稔幸 (白梅学園大学学長)
保育園や幼稚園の現状について
- 奥山千鶴子 (NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会理事長)
子育て支援施設の状況や保護者の立場から
- 渡辺英則 (港北幼稚園・ゆうゆうのもり保育園 理事長)
私立幼稚園や認定こども園の立場から

※当日の託児サービスについては
横浜市幼稚園協会 HP をご覧ください。



子どもにかかわる 大人が 今後すべきことは 何か



主催：公益社団法人 横浜市幼稚園協会
後援：横浜市子ども青少年局